

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年11月18日)

授業者：〇〇

範囲：三権の抑制と均衡

主な感想・代案

【授業づくりにおける問いの必要性】

- 重要なテーマだと思うので、いつもと違うタッチで描きたいと思います。私が〇〇君の授業に対して強い主張をしたのは、〇〇君の授業が問いのない授業だと思ったからです。
- 極端に言えば、問いさえ立てれば、教師がそれを説明しても良いと思います。ただ、一瞬でも疑問に思わせる必要がある。板書のきれいさよりもワークシートの良し悪しよりも、問いの有無が重要だと「私は」思います。私がそう思う背景について少し話しておきたいと思います。

【私の理解・経験】

- 私は、どういう指導をすると、記憶の定着が進むのか、生徒がテスト対策をしたいと思うのかということについて、今のところ確信を持っていません。ただ、自分の被教育経験に照らしてみれば、授業内の学びでテスト対策が十分だったことなど一度もありません。授業は授業。テスト対策はテスト対策。授業は意味がないとは思わないけど、点数を取るためには結局自分で勉強するしかなかった。
- だからこそ、最終的な自主学習を促進するのが何なのかという点に、私は強く惹かれます。結局は自分で勉強するしかないとしたときに、そういった気持ちにさせるのは何かということです。そう考えたときに、自分が学んでいることの中に「探究するに値する問いがあること」と「そこでの知識が実生活に使えるという実感が持てること」「バラバラの知識を構造化して理解できるという視点が持てること」というのは、自主学習の意味を明確化する上で、大切なのではないかと思います。
- 新学習指導要領では、学習者が学びの地図を描けるように、学びの目的意識を持てるようになることを求めています。同時に、教育心理学などで、知識の構造化が図れたり、バラバラの事象を一つの枠組みで捉えられるようになったときに知識の整理が進み、定着しやすくなる、といったりします。例えば、岩田(2001)の議論が参考になりそうです。
- それらの知識は単にまんべんなく学ぶのではなく、問いを追究するプロセスの中で学ぶ必要があると言われます。(問いは教師が発するだけでも場合によっては良いです。)

例えば、前頁のような構造で、内容設計をしていくことが必要である。社会科の授業において取り上げる諸事象がなぜ学ぶ価値があるのかについて説明できることが必要なのである。単元の内容がこのような構造で示されていると、その説明が可能になり、無暗な暗記を強いる授業にはならない。(p.45.)

社会科がいつまでも知識の暗記強化であるとの批判を受け続けるのは、知識分類が定着していないからである。説明力の大きい、質の良い知識は、当然、子どもが自ら学び習得していかなければならない。(p.45.)

概念的知識は、その単元で習得させたい法則性である。この知識は、概念と結果の関係が明治され、個別事象を超えた法則性を示す知識である。例えば、「他県との情報の交換量が増えれば、交易量が増加する」、「輸送方法の革新は、地域の生産様式を変革する」といった一般性の高い知識はこれにあたる。単元・授業設計においては、教師はその単元で育成する概念的知識の洗い出しをしておくことが必要となる。そして概念的知識の構造化ができれば、単元の授業目標が明確になる。

説明的知識は、一般性の高い概念的知識と、単元で扱う学習材とを結びつけた知識である。子どもは、概念的知識それ自体を学習対象とすることはできない。具体的事象を追究対象とし、その中から、事象間の関係を発見していくのである。(岩田、2001, p.46.)

【参考文献】岩田一彦『社会科固有の授業理論 30の提案 総合的学習との関係を明確にする視点』明治図書



そう考えたとき、やはり〇〇君の授業では概念的知識のようなものが抜け落ちているように思えます。ただ、関連する情報を順番に教えて、教師の目線で図化しているだけに見えてしまいます。